

せながむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第十八号（毎月一日発行）
平成三年三月一日

明治初期の

古平の人口

近藤 芳二

ニシン漁業が最も盛んなこの時代に、古平の人口はどのくらいであったのか、大変興味があるのではないだろうか。

当時（明治三年）の統計によると、古平の差網・建網の数、差網三五〇放、建網七八投となっている。これに従事する

| | | | | |
|------|------|-------|-------|-------|
| 永住家数 | 一〇一軒 | 四一一人 | 男二一五人 | 女一九六人 |
| 出稼家数 | 八三軒 | 一一〇五人 | 男九三七人 | 女一九六人 |
| 土人家数 | 三七軒 | 一一五人 | 男六二人 | 女五三人 |

この時代の永住家数とはどうゆう条件の数であるか、また、出稼家数の区別がどのようなを指しているのか不明である。

漁夫や、その他ニシン作業に従事する労務者ほどのくらい必要としたかについては、ほぼ計算されているが、古平の場合は、幸い巳年（明治二年）の「人数書上」という報告書がある。これを表にまとめると次のようになる。

土人（アイヌ）三七軒で五人は、西海岸で明治の初年としては、その数が多いようである。隣町の美国では、文化六年

（一八〇九）の調べで六七人、文政四年（一八二一）で五人、安政三年（一八五六）で一六八、うち一三人は男性で女性は三人、そのうち一人は六歳、一人は六五歳の老婆で、あとは酋長の妻四〇歳である。当時、美国の酋長は、「わしらの子孫は、あと十数年で絶えてしまうだろう。」と嘆いたと、『近世蝦夷人物史』に記されている。従っ

て、明治の初年では美国のアイヌが絶滅していることになる。美国と比較して、古平のアイヌの人口はとも多い数字ではないかと疑問である。但し、美国場所・島牧場所は、古くから非常にアイヌを酷使して有名である。しかし、古平場所もアイヌを酷使したという点では、例外ではなかったようである。

ウイソチの性能に敬慕嘆 大量漁獲時代の花形として活躍

明治三十七年、花田伝七が鬼鹿に『蒸気巻揚機』を据え付けしたが、この結果が良く大評判となった。海難の多い浜益周辺の親方連中は、わざわざ汽船を備

そのまま吊り揚げた。そして、網袋の底を開き、「廊下」（倉庫）に落としこむか、トロッコに移してから廊下に運んだ。

って見学に訪れた程であった。そしてその年の内に、浜益・厚田郡で八台の巻揚機が据え付けられた。古平ではそれよりかなり後になってから使われたこと

この方法だと、サンパ（三半）船一艘分の鯨を陸揚げするのに八分から十分で、モッコにくらべて十倍の能率であった。

なる。巻揚機を使う時には、網袋に棹船から汲んだ鯨を入れそれを

だが便利な機械も事故がおこりがちで、俱知安から出稼ぎの百日宅蔵（百）がトロッコと梁の間に挟まれて死亡、町内の石見千代一も大怪我をした。

つづく

生まれて初めて食べた

『ラーメン』の味

私の小学校五、六年ころの、或る雪の降る寒い晩だった。渡辺さんの兄さんと、入船町の漁師の家まで鱈の釣針を機で配達に行った帰りに、白川さんというラーメン屋さん（現在の中



央旅館の二、三軒チヨペタン橋寄りで、おやきも売っていた）で、ラーメンをご馳走してくれた。

胡椒の味も初めて、支那竹の入ったラーメンのうまかったこと、今でも忘れられない。そのころ、一般の家庭に胡椒なんてあったのかなあ？（我が家には無かったのは確か）、ともかく、初めて口にしたラーメンはそれが初めて、その後成人になるまで食べた記憶はない。別に

貧しさを恨むわけではないが、カレーライスだって、きつと我が家で作って食べたのは、ずーと後のことである。勿論、肉などは入っていない。蛸入りのカレーライスだった。今でも、「食べたいなあ」と思うものに、『まさかり南瓜』がある。あのポコポコした舌ざわりと風味は、そのころの人だ

けが知るものである。たいいてい芋・南瓜を食べて、それが昼飯がわりだったから腹いっぱい食べた。芋もち——すり鉢でこねてだんごにし、それを、醤油に黒砂糖を入れたたれにつけてよく食べた。今でも懐かしく、時々思い出しては食べてみたいと思う。今でも家庭にすり鉢なんてあるのかなあ？

小さいころは、味噌でもなんでも、一応摺ってから味噌汁として味わったものだ。かまぼこ

も殆んど自家製でうまかった。現在市販されているのは、漂白され、魚の臭いも無く、なんか味気無い。調味料で食べさせられているようだ。いくつぐらいの時か忘れたが、「熱いご飯に生卵をかけて食べる身分になりたいなあ」と思った。新巻鮭など、正月に一度口にするぐらいだった。ほんとうにそんな時代だった。でも、不幸だとか、暗い時代だったとか、そんなことは一度も思ってみたことは無かった。なぜか楽しく、懐かしさでいっぱい、心豊かに過ごした。ただ、あのいまわしい戦争をのぞけば——。

私の過去は、母のにおいがする生まれ故郷で育ってきたことに尽きる。人それぞれの人生だが、私には、「人生至るところ青山あり」の実感はない。喜びも悲しみも、私の町へ古平へが青山だと言いつける。

—— つづく ——



幻の「花ニシンカズノコ」

一名「エゾの廿花」

明治二十四年、当時は鯨のほとんどもは「搾粕」として利用されていて、「数の子」は現在のように珍重されなかった。

業界の指導的役割りを果たしていた北水協会が、この数の子の商品価値を高めようと試作したが十分ではなかった。

その後、長谷川源之助が研究の結果、市場価値のある製品が出来上がったので、道庁からの補助を受け、古平町の広谷漁場に製造所を設置して、製造のかわらその製法を教えていた。

以上が、明治四十一年発行の雑誌が伝えている概要である。これから考えると、『数の子』の商品としての価値が高まったのは大分後のようである。

さて、「花ニシンカズノコ」とはいったいどんな製品であったのか。資料は何も無い。幻のと付けた理由である。

活動の組織と今後の課題

二月には、町内婦人研修会が予定されておりますが、

旧婦連協の商工婦人部・漁業婦人部の皆様とご一緒の勉強会になろうかと思ひます。いくら組織が変わりましても、こんな小さな町での限られた婦人層ですので、どうして一つではいけないのか、疑問に思ひます。

新生婦人会は、他の団体と少し異なつたしくみで運営されております。まず、会を町内別に三つの部門に分けておりません。それぞれの部には一人づつ担当の副会長がつき、部長・副部長と共に部会の事業を遂行します。

①総務部 総会・役員会・会報の発行

②研修部 各種学習会・研修旅行

新生婦人会の歩み

③事業部 バザー・運動会・奉仕活動

各部の主な行事としては、総務部では新年会が大変です。町内毎に色々と趣向をこらして、一年分を楽しみます。

研修部では、学習会としてのサークル活動が盛んです。着付教室・ペン習字・和紙工芸・人形作り・生け花教室等、会員の中に講師の方がいらして、色々と勉強をさせていただいております。

そのほか、研修旅行も大きな仕事でありまして、毎月積立てをし、二年毎に本州方面へ旅行するのが会員の楽しみでもあります。

事業部は、春になると運動会があります。日ごろの運動不足を、少しでも解消できればと企画されたのですが、会員一同童心にかえつて

一日走りまわります。特に各部對抗のリレーは、大いに燃えて意気が上がります。

秋にはバザーが計画されてお

り、これがまた会の運営資金源として大切な行事ですので、会員も大張り切りですが、食券の販売、仕入れ等大変な面もございます。

一人一人は微力であっても、結束することによって大きな力となり、思わぬ成果が生まれて参ります。親睦の意味においても欠かせぬ事業といつていいでしょう。

その他奉仕活動として、敬老会・消防大会・交通安全運動等、地域に即応した実践活動を通して、会員一人一人が信頼し合

ニシンの起源

渡島支庁管内に爾志郡があるが、この『ニシ』もまた『ヌーシ』がなまったものである。アイヌは、たくさんとれる魚のことを『ヌーシ』といつてゐるからである。

また、多くの人は『ニシン』といい、『ニシ』という人は少ない。これは、松前地方の人は「ヌ」を「ニ」となまり、後に

い、健康で豊かな古平町を築く為に、私たち婦人の力が少しでもお役にたてるように努力しているところがございます。

今後の課題としましては、もっと多くの若い会員を勧誘したいと思つております。どこの会でも共通の悩みは、後継者の育成が遅れていることです。

魅力ある婦人会づくりを務めて、より良いかたちで、次代の若人に引き継ぎたいものだと、常々考へている次第でございます。

—— 終り ——
(新生婦人會會長 山口笑子)

「ン」を付ける習慣で別に意味は無い。「スイカ」を「スイカン」といつている所もある。

ニシンには、「鱈」の字が当てられているが、「青魚」は鯖と読まれるようになった。

嘉永三年(一八五〇)のころの本には、「背肉の干したものの(身欠鱈)は、いやしい人間の食うもので、猫の食べ物」とある。
(暁二十二年・『北水協會報告』より要約)

興奮しながら 読んで本

本間 銀 朔

小学校六年生ぐらいまでは、読み物は講談社発行の幼年倶楽部か、少年倶楽部（月刊誌で一部五〇銭ぐらいか）で、親が買ってくれるので値段はハッキリと覚えていない。少年倶楽部には、佐藤紅緑（作家である佐藤愛子さんの父）の連載小説『一直線』が当時人気があり、毎月の本の来るのを楽しみにしていた。今では浜町に高野名書店があり、いろいろな本を販売しているが、当時は、新地町にあった小樽新聞取次店、田沢さんのところで取り扱っていた。月刊誌も月遅れと云って、二、三か月経過すると、安値で買って読むことができた。本は大事なものととして大切に取り扱い、友達と貸したり借りたりしてお互いに読んだ。

単行本で人気のあったのは、

山中峯太郎『敵中横断三百里』であった。内容は、日本の密偵横川・沖の二人が、日露戦争の

前に変装してロシアに潜入し、やがて捕らえられて銃殺されることになった。しかし、刑場では目隠しを断りその刑を受けたというのである。その活躍ぶり、まさに血湧き肉躍り、興奮しながら読んだものである。本はポロポロになるぐらい、友達の間を回って読まれた。

つづく

〔△7日は、こんな日〕

古平・岩内間に道路建設

冬の山道を実地踏査（昭和八年）

大正九年に北海道議会で、入舸村を起点として岩内を終点とする、入舸・岩内線が準地方費道として認定された。

それから十三年後の昭和八年三月、古平・岩内間の道路建設

旧古平小学校《校門》を

ご存じの方おりませんか

文化会館の門柱が建っているあたりに、旧古平小学校の校門がありました。文化会館建設の時から、どうなったのか所在が全く分からなくなっていました。由緒ある『校門』についての記事を書きたいと思っておりますので、どなたかご存じの方がおられましたらお知らせください。（町史編さん室）

一行は、二人がかんじき、外はスキーで当丸峠を越え、岩内町で一泊、翌朝は、馬そりで足村奥の造材用の雪道へ出て、夜に稲倉石に着き、鉾山で一泊した。一行は翌日、スキーと馬そりで無事役場に帰着した。

だが、この入舸・岩内線は、当時大して経済効果も期待できないとして、この工事は見送られることになった。

しかし、この工事の着想は、およそ半世紀後に国道二二九号線として、ついに実現を見たのである。今は亡き関係者をはじめ、当時のご苦労に感謝をした。〔二回目の雪中踏査参加者の記念写真があり、懐かしい顔を見ることが出来る。町内関係者のみ——敬称略——〕

- 武田典・北浜嘉雄・三浦銀治
- 高見勝太郎・福井敏雄・八反田弘・武川清・大沢徹・平田千代吉・八反田幸太郎・高野勇次郎・田中吉太郎・本間愛蔵・梅野富蔵・斎藤兼太郎・田沢良吉・藤田秀雄・松岡秀雄・外内幸八・山崎清治外。